

今度選ぶなら君にしたい

仲村 ゆうな

あらすじ

ペットのハムスターが死んだ日、飛行機事故のニュースで聞いた「ハルヤマケイト」は、好きだった人の名前だった。

大学時代の同級生、春山の訃報を知った山田花。春山の死をきっかけに、花は春山の彼女、菅野菜乃香と大学卒業ぶりに再会する。そこで菜乃香から、春山が浮気していたと告げられる。予想外の告白に戸惑う花だったが、後輩の小林京一郎とともに、春山の浮気相手を探すことに。疑わしい人物は三人。花は菜乃香の代わりに三人に接触するが、なかなか尻尾を掴めない。花は菜乃香と関わっていくうちに、かつての春山への思いを募らせていく。また小林もそんな花にずっと思いを寄せていた。片思いを拗らせる花と小林、そして浮気を信じて疑わない菜乃香。三人の思いが交錯する。

痺れを切らした菜乃香は、ついに浮気相手と思わしき三人に会いに行く。すると三人から春山から預かっていたというものを渡される。それらを見る限り、春山は菜乃香にプロポーズしようとしていたことが分かった。それでも浮気を疑う菜乃香。浮気相手の搜索を続ける中、また別の人物が浮上する。だが、実際会うと、相手はただのおじさん。仕事での知り合いだった。落胆する菜乃香だったが、その人から、以前春山にハムスターを譲ったことがあると聞く。そんなことは初耳だった菜乃香は、花がハムスターを飼っていたことを思い出す。

菜乃香に春山と浮気していたのかと問い詰められた花は、ずっと隠していた、春山と再会したときのことを語り出す。だがハムスターをもらっただけ。春山は本当に菜乃香一筋だったのだ。その事実には涙する菜乃香。だがそれは感動の涙ではない。春山がプロポーズ前に死んだことを「重い」と言い出す。花は呆れるが、春山の死を受け入れられない菜乃香の姿を見て、改めて春山の本命は誰なのかを悟る。

花と小林は片思いに終止符を打ち、菜乃香は自分が本命であることを受け入れた。それぞれ

思いに区切りをつけるのだった。

登場人物表

山田 花 (24)	会社員
菅野 菜乃香 (24)	花の大学時代の同級生
小林 京一郎 (23)	花の大学時代の後輩
江田友加里 (26)	美容部員
菊池泰葉 (22)	タイ料理屋店員
鈴木真央 (24)	ケーキ屋店員
田淵将生 (24)	花の大学時代の同級生
浜名洋子 (24)	花の同僚
春山明美 (56)	ハルヤマケイトの母親
三木啓二 (56)	会社員

○アパート・リビング（夜）

真っ暗な部屋。

しんと静まり返ってる。

ハムスター用のケージがテーブルの上に乗っている。

鍵を開ける音。

花の声「ただいまー」

山田花（24）、入ってくる。

カーテンを閉め、明かりをつける。

ソファにあったリモコンを手取る。

テレビを点けると、ニュース番組が流れる。

リモコンをソファに投げる。

花「疲れたよー、カニちゃん」

花、ケージを見てハツとして、

花「カニちゃん？」

花、慌ててケージを覗く。

花「え、嘘、え、やだ、え、どうしよ」

アナウンサーの声「ハルヤマケイトさん。ハ

ルヤマケイトさんです」

ハツとしてテレビを見る花。

アナウンサーの声「繰り返しお伝えします。

日本時間今日午後一小时前、乗客一〇四名を

乗せたエアスターT24便の墜落事故、えー、

日本人の方も犠牲者が出ています。えー、ハ

ルヤマケイトさん。お名前は、ハルヤマケイ

トさんです」

テレビを見つめる花。

花「…：春山さん」

○同・台所（夜）

花、冷凍室の戸を閉める。

○同・リビング（夜）

花、アイスを持ってくる。

小林京一郎（23）、ソファに座ってスマホをいじっている。

小林「花さん。やっぱりハルヤマって春山さ

んっぽいです」

花、床に座りアイスをかじる。

小林「日本人で乗ってたの、春山さんだけだったっぽいですね。だから早く身元分かったのかな」

花「……」

小林「春山さんのインスタにも、アイスランド行くなって投稿があるし。田淵さんもほら、『R.I.P』投稿しとるし。ほら」

小林、花にスマホ画面を見せる。

小林「菅野さん、はさすがに何もしてないか」

小林、チラッと花の顔を見る。

シャクシャクアイスをかじる花。

小林「（咳払いして）とりあえずいろいろ分かったらその都度連絡しますよ」

花「うん」

小林「逆にしないほうがいいですか？」

花「ううん」

小林「……じゃ、連絡します」

花「うん」

小林、ため息をつき、ハムスターケーキを覗く。

小林「おい、カニクリームコロッケーやーい。……あれ？」

花「ああ、死んじゃった」

○会社・食堂

花、ラーメンをすすりながらスマホをいじる。

小林からラインが来る。

小林（ライン）「田淵さん主催でお別れ会するみたいですよ」

呆れた表情のキャラのスタンプが送られてくる。

もぐもぐ食べながらスマホ画面を見つめる花。

洋子「飛行機事故のニュース見た？」

浜名洋子（24）、花の隣に座る。

花、ビクツとする。

洋子「飛行機って怖いねえ」

花「……お疲れ様です」

洋子「彼女もいたんだって。ネットに写真出て

た」

カツ井を頬張る洋子。

洋子「未来あったはずなのにね。残念だよね。
綺麗な彼女さんだったのに」

花、勢いよくラーメンをすすする。

○イタリアンバル・店前（夜）

騒がしい声が聞こえてくる。

小林「もちろん招待されてないわけですが、凸
るんですか？」

花「まさか」

小林「ですよね」

店の様子を覗く小林。

小林「まあ田淵さん主催で斉藤さんあたりとか
富田さんらへんとかですね。あとまあ菅野さ
ん」

小林、スマホをいじる。

小林「ネット見ました？ もう春山さんの個人
情報祭りですよ。んで菅野さんの写真も出回
って。悲劇のヒロインす。マスコミも結構う
るさいみたいで参ってるっぽいですよ」

花「ふうん」

小林「ほんと大衆のキモいところですよね」

店員、店から出てきて、

店員「いらっしゃいませー？」

小林「あ」

店員「二名様ですか？ 入れますよ」

小林「いやえっと」

花「二名です」

花、店に入る。

店員「いらっしゃいませグランチェー！」

店員たち「いらっしゃいませグランチェー！」

小林、慌てて花のあとを追う。

○同・店内（夜）

店員「こちらのお席どうぞー。あとでお飲み物

お伺いに来ますー」

店員、厨房にはける。

小林「入っちゃいましたけど」

花「お腹すいたから」

小林「だからって」

小林、チラツと後方を見ると、田淵将生(24)らが騒いで食事している。

小林「まあいいですけど」

田淵たちの席を見る花。

輪の中心には菅野菜乃香(24)、座っている。

店員、やってきて、

店員「お飲み物お決まりですかー？」

花「サングリアの赤で」

小林「あ、えっとー、グレープジュースを」

店員「はい」

店員、厨房に向かいながら、

店員「グリ赤、グレープいただきましたグラツチェー！」

店員たち「グラツチェー！」

田淵の声「(大声で)春は永遠だ！」

小林「うるっさ」

小林、田淵たちの方を睨む。

小林「なんか春山さんの死をコンテンツ化してませんか？」

花「小林モツツアレラ平気？」

小林「あ、はい」

花「モツツアレラとバジルのピザと、生ハムと

ミートソースニョッキ食べたい」

小林「あーはいはい」

小林、呼び出しボタンを押す。

× × ×

田淵たちの席。

田淵「こんなにさあ、若くして……」

グイッと赤ワインを飲む田淵。

菜乃香、フォークでパスタをくるくる巻く。

田淵「俺二人の結婚式でカラオケするのが夢だったんだけどなあ……。な？ 菜乃香」

菜乃香「あ、うん……」

女、菜乃香の顔を覗き込んで、

女「菜乃香？ 大丈夫？」

菜乃香「大丈夫」

女「菜乃香が一番辛いよね」

男、うんうんと頷いて、
男「大丈夫か？　ちゃんと寝れてる？　飯だ
つて、全然進んでないもんな」
菜乃香「え？　あ、大丈夫だよ」
菜乃香、フォークを皿に置く。
男「春山ってめっちゃチーズ好きだったよな」
女「あー、確かに！」
遠くを見つめる菜乃香。
× × ×
花たちの席。
小林「うん、うまいうまい」
花、生ハムを食べながら、
花「私めっちゃ食欲あるな」
小林「太るんじゃないですか？」
花、小林の皿の生ハムを取って食べる。
田淵の声「あれっ？　小林？　小林だよな？」
ビクツとする小林。
田淵、ベルトを締め直しながら千鳥足で
寄って来る。
小林「（小声で）来た来た来た来た」
田淵「久しぶりじゃん」
小林「ど、ども」
田淵「（花の方を見て）何デート？」
小林「は、ハハッ」
田淵「春山のニュース、お前も見ただろ？」
小林「あー、はい」
田淵「今俺ら春山のお別れ会してんだよ。一瞬
でも顔出してけば？」
小林「あー、えっと」
小林、花をチラッと見る。
花、小さく頷く。
小林「あー、じゃあはい」
小林、席を立つ。
田淵「ごめんね彼女さん」
菜乃香たちの席に向かう田淵。
小林「あー、いえあのこの人も」
花、小林のあとを追う。
田淵「菜乃香ー。こいつ、小林。同じゼミだっ
た」
菜乃香「あ……」

田淵「偶然いた」
小林「ども」

花、小林の陰で小さく会釈する。
田淵「一杯だけ飲んでけよ。あれ、空いてるグラスはない？」
女「えー？」

わいわい騒ぐ一同。

小林・花、菜乃香の隣に座る。

菜乃香「久しぶりだね」

小林「お久しぶりです」

菜乃香「今何やってるの？」

小林「あ、建築会社で働いてて」

菜乃香「へえ」

小林「まあ事務ですけど」

菜乃香「山田さんは？」

花「へ？ あ、事務です」

菜乃香「（小林に）え、同じ会社？」

小林「あ、違います」

菜乃香「そっか」

菜乃香と花に挟まれた小林、二人をチラ

チラ見ながら、

小林「あー、えっとこの度は……」

菜乃香「うん」

田淵「小林ー！ 飲めー！」

田淵、グラスを掲げて来る。

菜乃香「ごめんね田淵くんが無理やり」

小林「あ、はい」

小林、苦笑いでグラスを受け取る。

空気と化している花。

○ 繁華街（夜）

並んで歩いている花と小林。

花「お腹いっぱい」

小林「まあまあうまかったですね」

花「ですね」

小林「……花さん暴走しなくてよかったです」

花「人のことなんだと」

小林「まあまあ」

辺りを見渡しながらフラフラ歩く花。

小林「田淵さん相変わらず黒光ってましたね。」

まじ何の仕事してんだって」

花、立ち止まる。

小林「え、吐く？」

花、駆けていく。

小林「え！ 花さん！」

○ラブホ街

小林、キョロキョロ見渡す。

花の声「違うじゃん！」

小林「花さん……？」

小林、慌てて走っていく。

花「何してん！ あんたら！」

道路の真ん中で仁王立ちしている花。

花の目の前には菜乃香と田淵。

田淵「え、何こいつ」

うつむいている菜乃香。

小林、花に駆け寄る。

小林「何してんすか花さん！」

花「こいつら……！ あほや！」

田淵「あ……（花を見て）小林の連れか」

小林「花さん、思ったより酔ってますよね。変

な方言出てるし」

花「こいつら！ ラブホ入りよーと！」

小林「え？」

田淵、目をそらす。

花「春山さんが！ 死んだとに！」

不審な目で見る通行人たち。

小林「ちよ、落ち着いてください」

田淵「（舌打ちして）小林ー。彼女連れて帰れ

よ」

小林「え、あ、はい」

小林、花の腕をつかみ、

小林「（小声で）花さん。ここはとりあえず」

花「何しよんの！ あほが！」

菜乃香「……何で言われなきゃなんないの」

花「はあ？」

菜乃香「関係ないよね？」

花「……関係ねえよ！」

花、小林の手を振り払い走り出す。

小林「花さん！」

菜乃香「……ちよっと待てよ！」

菜乃香、花を追いかけ腕をつかむ。

道路の真ん中で対峙する花と菜乃香。

花「な、なんすか」

菜乃香「……ケイの」

クラクション音。

花と菜乃香の目の前にタクシー。

小林の声「危ない！」

○マンション・寝室

ベッドから起き上がる人影。

ベッド横にある鏡の前に立つ。

鏡の中には菜乃香が映っている。

花の声「え！」

鏡の中で顔をぺたぺた触る菜乃香。

花の声「私……？」

ドアが開く音。

花の声「春山さん……？」

ハッとする鏡の中の菜乃香。

花の声「春山さん！」

○病院・病室（朝）

ベッドの上の花、ハッと目覚める。

小林、気づいて、

小林「花さん！」

花「……花」

小林、ナースコールを押して、

小林「あの！ 目覚めました！」

花、恐る恐る鼻を触る。

花「（苦笑いして）ははっ」

小林「まじ花さん死んだと思いましたよ」

花「何が起きたんだっけ」

小林「花さんタクシーに轢かれたんですよ。ま

ぁお医者さんの話では幸いなんとも無いら

しいですけど。でも一応頭打ったっぼいんで、

検査入院というか」

花「死んでない？」

小林「死んでないです」

花「そっかあ……」

小林「……春山さんのあと追うとか考えてま

す？」

花「いや別に」

小林「意味ないんでやめてくださいよ」

小林「ため息をつく。」

小林「まじびびった……」

花「……菅野さんは？」

小林「あの人なんともないですよ。ピンピンして帰りました」

花「よかったあ……」

小林「……よかったっすね」

○同・待合室

受付でお金を払う花。

花「お世話様でした」

○同・入口

花、出てくる。

スーツ姿の小林、歩いてくる。

小林「退院おめでとうございます」

花「一日だけね」

小林「送りますよ。外回り中なんでご飯とかは連れて行けないですけど」

花「あなた親切だね」

小林「どうぞこちらへ」

○車内

運転している小林。

花、助手席でジュースを飲んでいる。

花「私さぁ気失つてるとき夢見たんだよね」

小林「走馬灯ですか？」

花「死んでるやん。違うよ。なんか不思議な夢」

小林「どんなです？」

花「私が菅野さんになる夢」

小林「……ほー」

花「めっちゃ美人だったなあ。鼻もすらっとしてさ」

小林「変な夢ですな」

花「ワンチャンこの事故で菅野さんと入れ替わったり」

小林「そんな非現実的な話。ありえないですな」

ちゃんと検査してもらいました？ やばい
とこ打ったんじゃないですか？」
花「再検査してもらおうかあ」

○住宅街

車から降りてくる花。

小林「じゃ、お大事に」

花「はい、ごめんね仕事中に」

小林「いえ」

小林、車を走らせる。

花、伸びをする。

花「あいてて」

スマホの着信音。

花、スマホを見ると、『菜乃香』からラ
イン。

花「は？」

菜乃香（ライン）「大丈夫？ お見舞い行きた

いんだけど病室どこか教えてくれる？」

花「いやいやいや」

花（ライン）「大丈夫です」

花（ライン）「退院したので大丈夫です」

菜乃香（ライン）「じゃあ住所教えて」

花「なんで？」

○アパート・リビング

テーブルの上にはおしゃれな紙袋。

菜乃香「マカロン平気だった？」

花「あ、はい……」

菜乃香「よかった。そこの、おいしいから」

花「ありがとうございますわざわざ」

菜乃香「いいえ。その……私のせいでもあるし」

花「あ……いや別にあれは私が飛び出したの

が、悪かったんで」

菜乃香「……ごめんなさい」

花「……いえ」

菜乃香、ハムスター用のケージを見て、

菜乃香「うわっ！ ……ハムスター飼ってる

の？」

花「あ、いえ、死にました」

菜乃香「あ、ごめんね、ハムスター苦手で……」

花「ああ、はい」

○同・玄関

靴を履く菜乃香。

菜乃香「じゃあお大事に」

花「ありがとうございます。マカロンも。ほんとにあれ全部もらっちゃっていいんですか？ 半分持って帰ります？」

菜乃香「いいのいいの。私マカロン食べれないし」

花「え？ じゃあ……。ああ」

菜乃香「……ケイがおいしいって言ってたから」

花「……ありがとうございます、わざわざ」

菜乃香「いいえ」

花「菅野さんは最後の彼女になれてよかったです
すね」

菜乃香「え？」

花「ほら、よく言うじゃないですか。男は最初の男になりたがって、女は最後の女になりたがるって」

菜乃香「私別に、最後だったわけじゃないし」

花「は？」

菜乃香「……私も本命じゃなかったってこと」

花「え？」

菜乃香「じゃ、お邪魔しました」

ドアが閉まる。

花「……はあ？」

○会社・総務課

花「ご迷惑おかけして申し訳ございませんでした」

花、菓子を配り歩く。

同僚「車に跳ねられたんだって？ よかったね

く、大した事なくて」

花「ご迷惑おかけしました」

○同・食堂

弁当箱に入れたマカロンを頬張る花。

洋子、花の隣に座る。

洋子「大丈夫？　なんかあったら言ってね」
花「ありがとうございます」

洋子「私も昔車に轢かれそうになったことがある！　その時転んで縫ったんだよねえ」

花「へえ」

洋子「あれお昼それだけ？　（吹き出して）マカロン弁当？」

花「（マカロンを口に詰め込んで）ふあい」

○アパート・風呂場（夜）

空のハムスターケージを洗っている花。

○同・リビング（夜）

花、テレビを見ながらポテチを食べている。

花「……あー、もう！」

花、スマホを手に取り電話をかける。

菜乃香（電話）「もしもし？」

花「あなた正真正銘春山さんの本命ですよ」

菜乃香（電話）「は？」

花「友達に紹介して親に紹介してSNSにも二人の写真載せて。分かる？　特別なの！」

菜乃香（電話）「あの、何？」

花「むかつくんですよ！」

息が上がる花。

菜乃香（電話）「……何にも知らないでしょ」

花「……はあ？」

○カフェ・店内（夜）

店員「お待たせしましたー」

花の前に置かれたプレート。

草やら豆しか乗ってない。

菜乃香「ケイのことだけど」

花「え、あ、はい」

菜乃香「……山田さんだから言うね。ケイ浮気してたの」

花、豆をフォークで刺そうとして飛ばす。

花「え？」

菜乃香「浮気」

花「あ、別に聞こえなかったわけじゃなくて。」

春山さんが浮気？」

菜乃香「うん」

花「証拠は？」

菜乃香「……勘」

花「女の勘？ いやいや春山さんがそんなこと」

菜乃香「するわけない？」

花「……なんで私に言ったんですか」

菜乃香「浮気相手、知りたくない？」

○アパート・リビング（夜）

小林「え、で探すんですか？」

花「（おにぎりを食べながら）うん」

小林「春山さんが浮気ねえ」

花「スマホはないけどパソコンは家に置いてた

からそれから調べてみるって」

小林「うわあ……。俺は死ぬ前に処分しとこ。

てか抱えて死のう」

花「あほ」

小林「ていうか花さんよく菅野さんにキレまし

たね。今までずっと俺に八つ当たりしてたの

に」

花「……もう春山さんに嫌われないから」

小林「どんだけいじめても春山さんにチクられ

ないですもんね」

花「そこまで性格悪くないから」

小林「夜食食べてきたんじゃ？」

花「ウサギの餌じゃお腹膨れないよ！」

○マンション・寝室（夜）

シングルベッドに横たわる菜乃香。

枕は二つ。

菜乃香、もう一つの枕を撫でる。

田淵の声「菜乃香ー」

菜乃香、起き上がる。

○同・キッチン（夜）

飯盒やら鍋を段ボールに詰める田淵。

田淵「本当に全部いいの？」

菜乃香「キャンプするの田淵くんくらいだもん。

もらってくれると助かる」

田淵「サンキュ」

菜乃香「人ひとりいなくなるって大変だね。全然片付け終わんない」

菜乃香、ため息をつく。

田淵「……あの、この前は酔った勢いで、あれだったけど、俺本当に菜乃香のこと支えるつもりだから」

菜乃香「なんもしてないでしょ」

菜乃香、田淵に背を向け戸棚を整理する。

田淵、菜乃香を背後から抱きしめる。

菜乃香「ちよっと」

田淵「なあ、俺じゃだめ？」

菜乃香、ため息をつく。

田淵、慌てて離れて、

田淵「なんてな！ こんなことしたら春に呪い殺されるな！ 生き返ってくるかも」

菜乃香「それは……大丈夫でしょ」

○アパート・リビング

菜乃香「ケイのアカウントにパソコンからログインしたんだけど」

菜乃香、ノートパソコンを操作する。

花「え、どうやって？ パスワードとかあるんじゃない」

菜乃香「私の誕生日」

花「不用心……」

菜乃香「で、これ見て。何人かの女とLINEでやり取りしてるの」

花「あの、菅野さんって、どこからが浮気だと思えます？」

菜乃香「キスしたら」

花「この中に春山さんとキスした人がいると？」

菜乃香「目星付けた女は何人かいるんだよね。だから」

菜乃香、花を見つめる。

花「え？」

○百貨店・化粧品売り場

菜乃香「あの店でタッチアップしてもらってき

て」

花「え、私が？」

菜乃香「私の顔はたぶん向こう知ってるから。それとなくケイのこと聞き出してみて」

花「無理です」

× × ×

江田友加里（26）に口紅を塗ってもらっている花。

友加里「素敵ですねー！ お客様お肌が白いか
らこれくらいのお色味がお似合いかと」

花「え、えへへ……」

花、チラッと売り場の方を見る。

「一万八千円」の文字を見てギョツとする。

花「あんま、こういうの付けたことなくて」

友加里「えー、そうなんですか？ 何か付けてみようってきっかけがあつて？」

花「えー、あー、はい」

友加里「好きな人ができたとかですかー？ キヤー素敵！」

ハッとする花。

花「そ、そうなんですよー！ 好きな人ができて！ おしゃれしよう！」

友加里「いいですねえ！ 絶対向こうもキュンとしちゃいますよ。そうだ！ リップだけじゃなくおすすめのチークがありますよ！」

花「へっ？」

友加里、花の頬にブラシでチークを塗る。

花「あ、えと（ブラシをくすぐったく思いなが
ら）て、店員さんは彼氏とかいるんですか？」

友加里「えー？ 私ですか？ 好きな人はい
るんですけどねえ。……もう叶わなくて」

花「え？」

友加里「ほらー！ 素敵！」

花「うわあ」

鏡に夢中になる花。

○同・入口

紙袋を手に持つ花。

花「しばらく納豆ご飯生活なんですけど」

菜乃香「断ればよかったのに」
花「試させてもらったのに断れません！」
菜乃香「で、どうだった？」
花「……彼氏はいないけど好きな人はいるって。
でももう叶わないって」
菜乃香「死んだからね」
花「まだ相手が春山さんで決まったわけじゃ
菜乃香「じゃ、次行くよ」

○タイ料理屋・店内（夜）

花「またウサギの餌系ご飯ですか」

菜乃香「あ、来た」

菜乃香、メニューで顔を隠す。

菊池泰葉（22）、水を持ってくる。

泰葉「お決まりでしたらどうぞ」

花「あ、えっと、おすすめを」

泰葉「カオマンガイおいしいですよ」

花「カ……？ え？ じゃあそれで」

泰葉「お二つで？」

花「はい」

泰葉「はあい。少々お待ちください」

泰葉、厨房へ向かう。

花（小声で）カオなんとかって何味ですか？」

菜乃香「なんとかケイのこと聞き出して」

× × ×

泰葉、プレートをテーブルに並べて、

泰葉「お待たせしましたー」

うつむいている菜乃香。

花「あ、ありがとうございます。あ、あ、あの」

泰葉「ごゆっくりどうぞー」

泰葉、厨房に向かう。

花、泰葉の後ろ姿を見つめる。

○同・店前（夜）

店員の声「ありがとうございますー！」

花「おいしかったですね、カオマンガイ」

菜乃香「結局聞けなかったし」

花「私のせいですか？ ていうか聞くまでもな

かったと思いますけど」

菜乃香「え？」

花「あの人、左手の薬指に指輪してました。結婚してますよ」

菜乃香「よりによって既婚者と」

花「まだ決まったわけじゃ」

菜乃香「やっぱ直接本人に聞き出さないと」

花「私にそのコミ力があるとでも？ 人選ミスですよ」

菜乃香「だって他に誰も」

花「小林とか使えばいいじゃないですか。陰キヤのくせにあの人世渡り上手だから」

菜乃香「いやそれはちよっと」

花「小林なら面白がってやりますよ」

菜乃香「いいの？ だって彼氏でしょ？ あん巻き込むのも」

花「え？」

菜乃香「え？」

花「小林が私の彼氏だと？」

菜乃香「違うの？」

花「違いますよ！ ただの後輩です！ やめてください変な冗談」

菜乃香「でも小林くんはあなたのこと好きですよ？」

花「……そうですね」

菜乃香「……好かれてるの知ってるのに、そばに置いてるってこと？」

花「なんかその言い方」

菜乃香「利用してるみたいな」

花「あんただって田淵に同じようなことしてるじゃんか！ ていうか仕方ないじゃん！ だって私は！」

花、菜乃香の顔を見て口をつぐむ。

花「……とにかく、小林のことは気にしないでいいですよ。あの人暇なんで協力してくれるんじゃないですか」

菜乃香「そう……」

花「じゃあ私これで」

花、立ち去ろうとする。

菜乃香「待って」

花、立ち止まる。

菜乃香「甘いもの食べたくない？」

○ケーキ屋・店内（夜）

花、チラッと外を見る。

遠くで待っている菜乃香。

鈴木真央（24）、店の奥から出てくる。

真央「いらっしやいませ。ご自宅用ですか？」

花「え、あ、はい」

真央「いいですね。自分へのご褒美みたいな」

花「あはは」

真央「今日だと、ベリーのレアチーズとか、タ

ルト……はもう出ちゃいましたね。あ、テイ

ラミスも人気です」

花「じゃあ、レアチーズと、ティラミスで」

真央「はあい。彼氏さんとかと食べるんです

か？」

花「あー、はい」

真央「いいですねえ」

真央、テキパキとケーキを包装する。

花「……彼氏とか好きな人とかいます？」

真央「え？」

花「あ、いやすみません」

真央「あはは、私はなんかそういうのはもう……」

……

真央、レジを操作して、

真央「お二つで千二百六十円です」

花「え、はい」

○繁華街（夜）

花「そういうのはもう……だって」

菜乃香「含みあるね」

花「あ、ケーキ、レアチーズとティラミス、ど

つちがいいですか？」

菜乃香「私大丈夫。糖質制限してるから」

花「あ、ああ……」

菜乃香「じゃあ今日はありがとう。また連絡す

るね」

花「あ、はい」

菜乃香、歩いていく。

花「お疲れ様です……」

○マンション・リビング（夜）

花「糖質制限って何？」

小林「（ケーキを食べながら）俺もたまにしますよ。もう身体のこと気にする歳なんです」

花「じゃあケーキ食うな」

小林「花さん一人で二個食う気ですか。さすがに太りますよ」

花「ふん」

小林「まあ俺も関わっていいなら喜んで参加しますよ。任せてください。そこらへんは得意分野なんで」

花「小林が言うのと説得力があるな」

○同・玄関（夜）

小林、靴を履いて、

小林「お邪魔しました」

花「わざわざ夜に来てもらって」

小林「ちょうど帰宅途中だったんで」

花「カロリー高いケーキ食べてもらって」

小林「今日チートデイなんで」

花「私小林のこと利用してる？」

小林「（笑って）利用してください。じゃ、おやすみなさい」

小林、出て行く。

○カフェ・店内（夕）

菜乃香「ありがとう、小林くん」

小林「いえいえ」

花「一応大体のことは伝えてます」

小林「僕の方でも調べたんですがやはり菅野さんが見つけた三人が怪しいですね」

小林、スマホをいじる。

小林「美容部員江田友加里、タイ料理屋店員、菊池泰葉、ケーキ屋店員鈴木真央。いずれもSNSはサブ垢まで特定済みです」

花「敵に回したくない……」

菜乃香「その中の誰か……。もしくは三人ともか」

小林「とりあえずまた花さんが接触を図ってみます」

花「私？」

小林「徹底的に追い詰めましょう」

菜乃香「よろしく」

花「ねえ私？」

小林「まずは美容部員なんですけど」

菜乃香「あ、ごめん。今日は私これで失礼する

ね」

小林「え？」

菜乃香「ケイの葬儀なの」

× × ×

花、窓の外を見ると、歩いていく菜乃香の姿が見える。

小林「菅野さんて何がしたいんですかね？」

花「え？」

小林「浮気相手見つけて。だって見つけても意味ないじゃないですか」

花「それは」

小林「今更掘り返す必要ありますか？ 言い訳とか謝罪とか、もう……。きれいな思い出のままで終わらせたらいいじゃないですか」

花「……小林それ飲んだ？」

小林「え、まだありますけど」

花「すぐ飲んで」

小林「え、立ち上がり出口に向かう。」

小林「え、ちょ！」

小林、慌ててコーヒーを飲み咽る。

○葬儀場・駐車場（夜）

マスコミが大勢いる。

小林「うわやっぱマスコミ来てますね。そっとしておけや」

花「私も野次馬だけどね」

小林「参列しないんですか？」

花「しないよ。服黒じゃないもん」

小林「うわわ」

○同・入口（夜）

記者「葬儀終えられてお話お伺いしてもよろし

い
ですか？」

花・小林、駆けてくると、大勢のマスク
ミに囲まれて、菜乃香の姿が見える。
記者「春山さんには最後なんと声かけられたん
ですか？」

ふと目が合う花と菜乃香。

見つめ合う二人。

警備員数名やって来てくる。

警備員「はい、すみませんー」

警備員「はい、通してー」

菜乃香、警備員に導かれながらタクシー
に乗る。

小林「いやあ菅野さん正妻って感じでしたね。

俺黒紋付見えましたもん」

花「……」

小林「すみません」

○マンション・リビング（夜）

菜乃香、タオルを段ボールに詰める。

段ボールが重なり、整理された室内。

チャイムが鳴る。

○同・玄関（夜）

菜乃香、ドアを開けると、春山明美（55）、
立っている。

菜乃香「お義母さん」

○同・リビング（夜）

明美「ありがとうね。ケイトの部屋の片づけま
で」

菜乃香「いえ」

明美「なかなかこっちに来れなくて」

菜乃香「お義母さん、大丈夫ですか？ 休めて

ます？ 顔色が」

明美「うーん……。やっぱりね、夜も眠れなく
て」

明美、菜乃香の手を握る。

明美「ケイトは幸せ者だね。菜乃香ちゃんみた
いな素敵な人がいて……。これから、だった
のにねえ。これから……」

泣き崩れる明美。
菜乃香、明美の背中を擦る。

○百貨店・化粧品売り場

友加里にファンデーションを塗っても
らっている花。

友加里「また来てくださって嬉しいです。ど

うでしたこの前の」

花「あ、なんか好評で」

友加里「好きな人にも？」

花「まあ、はい」

友加里「このファンデーションもすごくおす
めで、お客様お肌きれいだから必要ないかも
しれないけど、もつときれいに見せれますよ」

花「（つばを飲み込んで）あの」

友加里「はい？」

花「私の好きな人、彼女いて」

黙ってファンデーションを塗り続ける

友加里。

花「どう、思いますかね……」

鏡越しに花と目を合わせる友加里。

ニコツと笑う。

○タイ料理屋・店内

泰葉「いいんじゃないですか？」

花「へ？」

泰葉「ガパオライスだったら男性でも好きな方
多いですよ」

泰葉、花の前にマンゴープリンを置く。

○ケーキ屋・店内

真央「別に犯罪なわけではないし」

花「はあ……」

真央「（ケーキ箱を渡して）はい、バスクチー
ズとビターショコラです。どちらも男性にも
人気ですよ」

花「ありがとうございます……」

○アパート・リビング（夜）

小林「全員怪しいじゃないですか」

花「だよねえ」

小林「もつと突っ込んだ方がいいのかな」

花「また私行くの？ もう嫌だよ。コミ力も
うないよ」

チャイムが鳴る。

花「あ」

× × ×

菜乃香、紙袋を抱えて入って来る。

菜乃香「お疲れ様ー」

小林「お疲れ様です」

菜乃香「小林くんこれ」

小林「あー、ありがとうございます」

紙袋が気になる花。

菜乃香「（花に）ケイの家にあつたやつ。小林
くんに引き取ってもらおうって」

小林「DVDですよ。（紙袋を覗いて）うわ、こ
れも持ってたんだ」

花「ふうん」

菜乃香「もらってくれて助かった。ケイって荷
物多くてさ。なかなか片付かなくて」

花「…片付けてるんですか？」

菜乃香「向こうのお義母さん今こっち来てて。
持って帰るもの以外はあげるとかしてくれ
ていいって」

花「ふうん…」

小林「（咳払いして）で、三人の容疑者ですけ
ど全員怪しいです」

菜乃香「そう」
小林「SNSも監視してますけど、決定的な証拠
はなくて」

菜乃香「DMも前のメッセージは消されてたん
だよね」

花・小林、顔を見合わせる。

菜乃香「何かしらやり取りはしてたはずなのに、
最後に『ありがとう』だけ送ってた」

花「なるほど」

小林「としか言えないですね」

菜乃香「でも三人が怪しいんだよね」

小林「まあ、はい。客観的に」

菜乃香「よし、私が直接聞きに行く」

小林「え」

菜乃香「その方が手っ取り早い」

小林「いやいやなんて聞くんですか？ 浮気してましたかって？ 花さんオナラしました？」

花「してないよ！」

小林「ほら、しないって言いますよ」

花「してないって！」

小林「分かっていますよ。例えが悪かったです」

菜乃香「じゃあどうすればいいの！」

菜乃香、ハツとして、

菜乃香「……ごめん」

小林「よし、とりあえず浮気相手が分かれば昔

野さんはすつきりするんですよね？」

菜乃香「うん」

小林「刺したりしないですよね？」

菜乃香「刺さない」

小林「よし、じゃあ探しましょう！ ね」

○同・玄関（夜）

小林「いろいろ作戦立ててから行きましょう。

確実に見つけるために」

菜乃香「うん」

小林「暴走しないでくださいね？」

菜乃香、パンプスを履く。

小林「僕らももっと情報集めますから」

花、小林の顔を見る。

菜乃香「ありがとう。あ、じゃあ調べてほしいんだよね。三人の中でアイスランドに関係ある人」

小林「アイスランド？」

菜乃香「ケイが今回アイスランド行ったのも、

たぶん相手の影響だから」

小林「はあ、なるほど」

菜乃香「アイスランドなんて、一回も聞いたこと

なかったのに。急に行くって言い出して」

小林「まあ調べてみます」

菜乃香「ありがとう。山田さんも」

花「え？ ああ、はい」

菜乃香「じゃあ」

菜乃香、出て行く。

花「……」

○百貨店・化粧品売り場

小林「俺ここに入って大丈夫ですか？ 捕まらない？」

花「大丈夫だよ、たぶん」

小林「たぶんじゃだめなんですよ」

友加里「いらっしやいませー」

花「あ、どうも」

友加里「どうも、こんにちはー」

友加里、花と小林をチラチラ見る。

花「あ、あの連れがいても見て大丈夫なものですか」

友加里「もちろんですよ！ ぜひぜひ一緒にご覧になってください」

友加里、花に笑顔でアイコンタクトを取る。

苦笑いする花。

友加里「今日はプレゼントとかですか？」

小林「え、あ、はい、まあ」

友加里「素敵ですねぇ！ 何か候補とかは」

花「い、いやあ」

友加里「でしたら！ おすすめがありました！」

友加里、商品棚に向かう。

小林「（花に）あの、予算は五千円で」

花「しっ！」

友加里、リップとパンフレットを持ってくる。

友加里「こちらなんかおすすすめです。当店のサイビスで刻印もできるんですよー」

花「へえ」

友加里「プレゼントだと、お相手のお名前とかお二人の記念日とかオーダーされる方多いですよ」

友加里、小林にパンフレットを渡す。

小林、熱心にパンフレットを読む。

友加里「世界に一つだけのプレゼントになるんです。そんなものを好きな人からもらったら幸せですよね」

小林「なるほど」

女の声「すみませーん」

友加里「ごゆっくりご覧になってください」

友加里、客のもとへ駆けて行く。

商品棚を見る花。

小林「もらったなら嬉しいです？ 花って刻印してプレゼントしましょうか？」

花「一万八千円」

小林「却下で」

○タイ料理屋・店内

泰葉「お待たせしました、ガパオライスです」

小林「ガパ……？ え？」

花「ありがとうございます」

泰葉、花と小林をチラッと見て微笑む。

苦笑いする花。

泰葉「セットのデザート食後にお持ちしますね」

小林「あ、ありがとうございます」

小林、ふと泰葉の左手薬指の指輪を見る。

花にチラチラとアイコンタクトを送る。

「無理無理」と首を横に振る花。

泰葉、小林の視線に気づく。

小林「あ、あー、なんか素敵な指輪だなんて」

泰葉「え？ ああ、これですか？」

泰葉、指輪を見て微笑む。

泰葉「手作りなんです」

小林「へえ！」

泰葉「プレゼントで作ってくれて。ごゆっくり」

泰葉、厨房に向かう。

花、ガパオライスを一口食べ、

花「うまつ！」

小林「そんな……」

小林、一口食べて、

小林「うんま！」

花「おいしい、おいしい」

パクパク食べる花。

小林「花さん手作りの指輪もらったなら嬉しいです？」

花「値段によるな」

小林「プレゼントは気持ちって考えがないんで

花「値段に気持ちが悪く表れてると思うんだ」
小林「花さんのそういうとこいいですね」
花「褒められたんですけど」
小林「俺だって他人のこと褒めたりしますよ」

○ケーキ屋・店内

真央「いらつしやいませ」

真央、花と小林を交互に見てニコニコする。

花「（苦笑いして）どうも」

真央「本日だとフルーツタルトおすすめですよ」

花「あ」

真央「一緒に食べるんだったらホールでも」

小林「ホールはさすがに」

花「ホールで食べるの夢」

小林「ホールいいですね」

真央「うちはホールケーキのオーダーメイドもできますよ。上に乗せるトッピングとか生クリームのご甘さとかもご指定いただけるので、よかったですね。二人の大切な日とかに」

花「あはは……」

小林「検討します」

花「今日はえっとー、タルトと……。小林は？」

小林「あー、えっとモンブランで」

真央「はあい。今お包みますね」

○アパート・リビング（夜）

小林「ケーキを頬張る花と小林」

花「高いだけありますね」

小林「うん」

小林「花さんの誕生日、あそこでホール予約しますか」

花「何でだよ」

小林「あの、花さんの似顔絵書いてもらって」

花「いらな」

小林「あはは」

大きな口で食べる花。

口の端にクリームがついている。

小林、それを見て笑う。

ティッシュを取り、花に差し出す。

花、ティッシュを受け取り、口を拭く。

小林「結局核心はつけませんでしたね」

花「うん」

小林「やっぱ本人目の前にするとなかなか」

花「でしよう？」

小林「舐めてました。すみません。俺は俺のや

り方でいきます」

花「小林のやり方？」

小林「ネトストします」

花「こわ」

小林「今日成果上げられなかった分頑張ります

よ。なんか、ただデートしただけみたいな」

花「そうだね」

小林「楽しかったですか？」

花「うん」

小林「そっすか。よかったです」

花「うん」

小林「…：花さんはー、その」

花「うん？」

小林「好きな人います？」

花「何その修学旅行の夜みたいな質問」

小林「誰にも言わないから」

花「誰に言うんだよ」

小林「じゃあせーのですね？ せーので」

花「（笑って）何それ」

小林「せーの、せーの」

花「（笑って）やば」

見つめ合う花と小林。

小林、口を開こうとして、

花「言わないんかい！」

小林「あはは、土壇場で裏切る奴」

花「さいてー」

笑い転げる花。

小林「（花を見つめて）…：」

○同・玄関（夜）

靴を履く小林。

小林「お邪魔しました」

花「ごめんねカロリー高いものばっか食べさせて」

小林「いえいえ。太るときは一緒ですよ」

花「遠慮しときます」

小林「じゃあ花さんだけ太ってください。俺は帰ったら DVD 見ながらエアロバイク乗るんで」

花「春山さんの？」

小林「かかとを直しながら、」

小林「……そうっす」

花「へえ」

小林「花さんも何かほしいんですか」

花「え、いや別に」

小林「ふうん」

○マンション・リビング

花「お邪魔します」

ほとんど何もない部屋。

段ボールが何箱か積んである。

菜乃香「何か欲しいものあれば」

花「はい」

菜乃香「まあほとんど無いんだけどね。みんな

持ってっちゃって」

花「ああ」

菜乃香「人気者だから」

花、部屋を見渡す。

花「菅野さんは何を持って行ったんですか？」

菜乃香「私？ 私は、別に」

花「へえ……」

花、段ボールの中を覗く。

スマホの着信音。

菜乃香、スマホを見て、

菜乃香「あ、ごめん電話」

花「あ、はい」

菜乃香「（電話に出て）もしもし」

菜乃香、リビングから出て行く。

花、段ボールを閉じる。

部屋を見渡すと、側面に『衣類』と

書かれた段ボールがある。

花、その段ボールを開く。

「シャツが敷き詰められている。
花、一枚手に取る。

ぎゅっと抱きしめる。
頬をすり寄せる。

菜乃香、リビングに入って来る。

菜乃香「ごめんね。管理会社だった」

花、慌てて「シャツを段ボールにしまう。

菜乃香「あ、「シャツ？ ほしい？」

花「あ！ いや！」

菜乃香「ごめん、それは斉藤くんにあげる約束
してて」

花「はい！ 大丈夫です！」

花、段ボールを閉じる。

菜乃香「なんだろうな、本とか読むのあったら」

花「あ、はい！」

菜乃香、段ボールを開ける。

花、適当に段ボールを開ける。

花「（棒読みで）どれがいいかなー」

逆さまに本をめくる花。

菜乃香「……ケイってさ、山田さんと付き合っ
てた時はどんな感じだった？」

手が止まる花。

花「……私春山さんと付き合ったことないです
よ」

菜乃香「え、でも三年の時よく一緒にいたとき
なかった？」

花「あー、あれは全然。そういうのじゃなく。

友達で」

菜乃香「そう、だったんだ」

花「（苦笑いして）はい」

菜乃香「ああ、そうなんだ」

花「どうしたんですか、そんなん聞いて」

菜乃香「実は、ちょっと気にしてたんだよね」

花「え？」

菜乃香「山田さんと付き合ってたのに、取っ
ちやっただのかなって」

○居酒屋・店内（夜）

花「取ってんだよ！」

小林「まあまあ」

花「え、何あれ喧嘩売ってた？ え、買えばよ
かった？ 今から買ってこよか？」

立ち上がる花。

小林「（花を座らせて）まあまあ」

花「略奪愛じゃなくて罪悪感無くなりましたか。
いがったねえ！」

小林「菅野さんが言ってたのあれですよ。菅
野さんが編入してきたばっかのときの」

花「うん」

小林「花さんが春山さんに土下座して、そばに
いさせてくださいって頼み込んだ時期」

花「土下座はしとらん！」

小林「あまりの形相に春山さんが同情して花さ
んとお昼だけ食べてた時期」

花「もお、やめて」

小林「花さんにしては思い切ったことしたなあ
と思っただんですよねえ。三年も片思いこじら
せてた人が」

花「…菅野さんが来たからね。焦って」

小林「そういや騒いでましたね。春山さんのタ
イプの女が来たって。案の定二人は付き合っ
たわけですが」

花、日本酒をグイッと飲む。

花「春山さんのさ、菅野さんを見つけたときの
顔、見たことある？」

小林「はい？」

花「遠くの方に菅野さんの姿を見つけたときの
春山さんの横顔…」

小林「…（日本酒を飲む）」

花「きれいだったなあ。鼻筋がスーッと通って」
小林、花のおちよこに日本酒を注ぐ。

花「あの顔、私は正面から見たことないなあ。
いっつも横顔。でも横顔が一番…」

小林「…花さんも鼻高いですよ」

花「目を見て言ってみ？」

目を合わせない小林。

花「ねえ？ ねえ？」

小林「あ、なんか食べたいなあ」

花「ねえ？」

ふざけてじゃれ合う二人。

小林「そーいや春山さんちで何もらったんですか？」

花「え？ ああ」

花、バッグから紅茶のパックの取り出す。

小林「え、それ？」

花「うん。何か文句ある？」

小林「わざわざ行ってどこでも買えそうな紅茶のパック？」

花「おいしそうじゃん！」

小林「よかったですね」

花「よかったですよ。ほらいいだろ」

花、小林の顔にパックを突き出す。

小林の「痛い痛い目に入るから」

花「私はこれで十分」

紅茶のパックを見つめる花。

○路地裏（夜）

千鳥足で歩く小林。

花「小林、ちゃんと歩いて」

小林「歩いてます。地面が曲がってるだけで」

花「弱いのに私にペース合わせるから」

小林「花さんだっていうて強くないでしょ」

花「雑魚には勝つよ」

小林「誰が雑魚すか」

花、バッグから紅茶のパックを取り出す。

花「あ、これ水でもいけるんだ」

小林「…：花さん」

花「うん？」

小林「あのとき取られたって思ったの花さんだけじゃないですよ」

花「何が？」

小林「花さんと春山さんが一緒にお昼食べてた二週間。人生最大の地獄でした」

花「はあ？」

小林「いつも学食の隅っこで食べてたのに」

花「あの壁向きのね、カウンター席ね」

小林「あそこでよく並んで食べてたじゃないですか。やっすいラーメン」

花「よく隣になつて食べてたね」

小林「隣にしてたんですよ。花さんの隣狙って

たんで」

花「……小林終電大丈夫？」

小林「花さん好きです」

花「……何で今言うの」

小林「タイミングはすみません。よく考えずに
言っちゃいました」

花「やば」

小林「前から何回か伝えてたと思うんですけど、
好きです」

花「私それに対して返事したことないよね」

小林「しなくて大丈夫です」

花「何それ。じゃあ何で言ったの」

小林「すみません、我慢できなくて、思わず口
から」

花「ゲロよりタチ悪いよ」

小林「俺が好きなの花さんです。花さんラブで
す」

花「酔ってるでしょ」

小林「酔ってないです」

花「酔ってるよね？」

小林「酔ってますけど本当のことです」

花「……マジで何で今言ったの」

小林「生きてるから」

小林「花をじっと見つめる。

小林「花さんも俺も生きてるから」

花「……」

小林「花さん」

花、紅茶のパックを小林に押し付け走り
出す。

小林「え、花さん！」

小林「紅茶のパックを掲げて、

小林「ちよ、これ！ いいんですか！」

花「どこでも買えるからいい！」
走っていく花。

取り残された小林。

紅茶のパックを見て、

小林「賞味期限切れてるじゃん」

小林「ため息をつく。」

○マンション・寝室

ベッドに寝ている菜乃香。
スマホをいじっている。

電話をかけて、
菜乃香「あ、山田さん？ 今大丈夫？」

○スーパー・店内

電話をしながらカートを押している花。

花「はい」

菜乃香（電話）「また一緒に行ってくれないかな、三人のどこ」

花「いや私もう……」

花、紅茶のパックを手取る。

じっと見つめて、かごに入れる。

菜乃香（電話）「そろそろボロ出すころだと思います
うんだけど」

花「すみません、私行けないです」

菜乃香（電話）「え？」

花「買い物なんで失礼します」

花、電話を切る。

カートを押して、ふと商品棚を見ると、

ハムスターの餌が置いてある。

花、じっと見つめる。

○マンション・リビング

菜乃香、写真立てを手取る。

写真は抜かれている。

空の写真立てを見つめる菜乃香。

ため息をつき、乱暴に段ボールにしまう。

○百貨店・化粧品売り場

友加里、商品を並べ直している。

ハイヒールの音が近づく。

友加里、顔を上げると、菜乃香が向かってくる。

菜乃香「……こんにちは」

友加里「……いらっしやいませ」

友加里、深くお辞儀をする。

菜乃香、友加里をまっすぐ見つめて、

菜乃香「試したい商品があるんですけど」

友加里、カウンターに向かう。

「あれ？」と戸惑う菜乃香。

友加里、柵から紙袋を取り出す。

不安そうにあたりをキョロキョロする

菜乃香。

友加里、菜乃香のもとに来る。

菜乃香、慌てて胸を張り友加里に対峙する。

友加里、菜乃香に紙袋を差し出す。

菜乃香「え？」

友加里「お待ちしておりました」

菜乃香「……」

○タイ料理屋・店前

泰葉、紙袋を持って出てくる。

菜乃香に差し出し、

泰葉「私が預かってたんです。このオーナーと知り合いなんです。……仕上がったのに取りに来ないからって」

○ケーキ屋・店内

真央、紙袋を菜乃香に差し出して、

真央「実際にご注文されてたのはホールなんですけど、今は店頭に出してるカットのものしかなくて」

菜乃香、紙袋を受け取る。

反対の手には二つの紙袋。

真央「あ、砂糖菓子上に乗せておきました。

……オーダー通りのもの」

菜乃香「……」

○アパート・リビング（夜）

花、電話をしている。

小林（電話）「俺二十四歳OLになりきったんですね」

花「うん？」

小林（電話）「そしたら三人の鍵垢突破して」

花「うん」

○駐車場（夜）

車に乗っている小林。

小林「三人とも春山さんの浮気相手ではありませんでした」

○アパート・リビング（夜）

小林（電話）「江田友加里は二年片思いしてた人が最近結婚したそうです」

花「……だからもう叶わない」

小林（電話）「菊池泰葉はタイ人と国際結婚しています。夫はタイにいて、働いている。タイ料理屋の店長と不倫しています。で、鈴木真央はホストクラブに通っていて、相当入れ込んでいます」

花「そう……」

○駐車場（夜）

小林「というわけで、三人とも春山さんと浮気関係になかった。報告は以上となります」

花（電話）「（鼻で笑って）一人勝ちってこと」

小林「え？」

○アパート・リビング（夜）

小林（電話）「あの、とりあえず今からそっち行っているんですか。いろいろ、話したいんで」

花「……」

○駐車場（夜）

電話が切れる。

小林「花さん？ 花さん？」

小林「スマホの画面を見て、」

小林「切った……」

小林、袖でスマホの画面を拭く。

○マンション・リビング（夜）

小さな箱、リボンのかかった箱、ケーキ箱が床に置かれている。

菜乃香、小さな箱を開けると、中にはリップ。

パッケージに『nanoka』と刻印されている。

リボンのかかった箱を手に取る。

リボンをほだき、箱を開けると、中には指輪。

ケーキ箱に手を伸ばす。

ケーキを取り出すと、上にはウエディングドレス姿の人形の砂糖菓子が乗っている。

頭を抱え、深いため息をつく菜乃香。

○カフェ・店内

小林「春山さんプロポーズしようとしてたんですね」

菜乃香「やっぱそういうことだよね……」

小林「今日花さん来なくて正解でしたよ。聞かせたくなかったんで」

菜乃香「山田さんは？」

小林「……ま、いろいろ。菅野さん、これ分かったでしょう。春山さん浮気してなかったですよ」

菜乃香「……分かんないじゃん」

小林「いや分かりますよ。こんだけ証拠揃って。三人にはプロポーズに向けて相談してただけ。メッセージ消したのもサプライズがバレないため。めっちゃくちや菅野さん一筋じゃないですか」

菜乃香「どうかかな」

小林「菅野さん、まじで何がしたいんですか？」

菜乃香「ケイはなんか隠してた。それを知りたいの」

小林「だからプロポーズのことでしょ」

菜乃香「それ以外で、何か……」

小林「あつたとして、知ってどうするんですか。もう……」

菜乃香「ケイは死んでるよ？」

小林「……すみません」

菜乃香「だから知りたいの。本人に直接聞けないから」

小林「よく分かんないです」

菜乃香「分からなくていいよ」

小林「じゃあもう僕ら降りていいですね」

菜乃香「うん、ありがとうね」

小林、席を立つ。

菜乃香「あ、ねえアイスランドのことは？ 調

べてくれた？ あの三人以外にいたかも」

小林「いいないです。春山さんの趣味じゃないですか？」

菜乃香「アイスランド旅行趣味の女とか、アイ

スランド人の女とか！」

小林「（諭すように）菅野さん」

菜乃香「じゃないと……」

小林「もう行かなきゃなんでいいですか？ こ

れからデートなんで」

菜乃香「山田さんと？」

小林「普通にアプリで知り合った子です」

菜乃香「山田さんのこと好きなんじゃないの？」

小林「僕だって女の子と遊びたくなることあり

ますよ。二十三歳男性なんで」

菜乃香「やっぱ男って浮気性だよね」

小林「人つてどつかで息抜き必要じゃないです

か。特に相手にされてない人は」

菜乃香「息抜きね」

小林「だって、たまには自分に好意向けてくれ

る人と会わないと。自己肯定感満たされなく

ないですか？ しんどすぎるでしょ。なのに

あの人は……」

菜乃香「何回か会ってるの？」

小林「二回目です。今日は焼肉です」

小林、出口に向かう。

○マンション・リビング（夜）

段ボールの中を探っている菜乃香。

× × ×

菜乃香、ノートパソコンを操作している。

部屋にクリック音が響く。

菜乃香「（ため息をついて）何も無い……」

スマホの着信音。

菜乃香、スマホを見ると、『MIKI』から

DMが届いている。

開くと、『ケイトさんの彼女さんですよ

ね？ 一度お会いできませんか？』とメ

ッセージ。

『MIKI』のアイコンを見ると、オーロラの写真。
菜乃香「……」

○アパート・リビング（夜）

スマホの着信音。

花、スマホを見ると、菜乃香からライン。
菜乃香（ライン）「ケイの浮気相手分かったかも」

花、スマホを置き、深くため息をつく。

○寿司屋・店内

カウンターに並んで座っている小林とギヤル。

ギヤル「（寿司を頬張って）うーん！ おいしい！」

小林「よかった」

ギヤル「すみませんウニ」

職人「あいよっ」

ギヤル「こぼくんも何か頼みなよ」

小林「あー、かつぱ巻きを」

職人「あいよっ」

ギヤル「この前の焼肉もおいしかったけど、このお寿司も最高だね」

小林「あはは……」

ギヤル「こぼくんが彼氏だったらもっと最高かも」

小林「……あかりちゃん、そのことなんだけど」

ギヤル「（食べながら）うん？」

小林「俺、好きな人いるんだよね」

お茶を飲むギヤル。

小林「だからその、すぐにどうこうってわけじゃないんだけど、しばらく友達として付き合い合っ
つててくれると助かる」

ギヤル「は？ あかりも遊びに決まってんじや
ん」

小林「へ？」

ギヤル「あかりも好きぴいるし」

小林「あ、あー、そうなんだー」

ギヤル「何思いあがってんの。ウケる」

小林「あはは……」

ギャル「ただご飯おごってくれる人ポジだつ
うの」

小林「メッシー……」

ギャル「あんたが好きぴになれるわけないじや
ん」

小林「俺のどこがだめ？」

ギャル「食い下がってきてウケる」

小林「参考に聞かせて！」

ギャル「うーん。好きぴと違うところ？」

小林「どうやったら勝てる？」

ギャル「無理だね」

小林「え！」

ギャル「好きぴが好きぴである限り。好きぴつ
てそういうもんだから」

小林「……好きぴの好きぴになるためにはどう
したらいいかな」

ギャル「まずそのダセエ服やめろや。すみませ
ーん、大トロ」

職人「あいよっ」

小林、ガリを食べる。

○駅・構内

菜乃香、キョロキョロ辺りを見渡す。

スマホを見る。

画面には『MIKI』のSNS。

映えている写真が並んでいる。

菜乃香に近づく靴音。

菜乃香、ハツとして振り返る。

菜乃香「え？」

菜乃香の目の前には三木啓二(56)。

三木「初めまして。三木啓二と申します」

菜乃香「え、あ、三木さん？」

○カフェ・店内

向かい合って座っている菜乃香と三木。

三木「この度はご愁傷様でございます……」

三木、深々と頭を下げる。

菜乃香「あ、いえ……」

三木「私も最近日本に戻ってきたばかりで。ケ

イトさんのことを知って……」

菜乃香「そう、でしたか。あの、ケイ、春山とはどこで？」

三木「ケイトさんの会社と取引がありましたね。そこで私の趣味の海外旅行の話になったら話が弾んで」

菜乃香「そうだったんですね」

三木「あ、ちなみに私のアイコンはアイスランドに行った時のオーロラです」

菜乃香「アイスランド？」

菜乃香「スマホをチラッと見る。」

菜乃香「あ、あくなるほど」

三木「本当にいい若者でした……」

三木「鼻をすする。」

菜乃香「あはは……」

○同・店前

店から出てきた菜乃香と三木。

三木「お時間いただきありがとうございます」

菜乃香「いえこちらこそ。……たくさんお話を聞いてよかったです」

三木「深くお辞儀する。」

菜乃香「(会釈して)では」

三木「あ、そういえばハムちゃんは元気ですか？」

菜乃香「え？」

三木「前に知り合いがハムスターのもらい手に困ってましてね。ケイトさんにもご協力いただいたんです」

菜乃香「ハムスター？」

三木「はい。あれ、信頼できる人に引き取ってもらったって……」

菜乃香「……」

○アパート・リビング(夜)

花、空のハムスターケージを覗く。

回し車を指で回す。

チャイムが鳴る。

○同・玄関(夜)

花、ドアを開ける。

と、同時に倒れこんで入って来る小林。

花「うわ！ え、ちよ！」

花、小林を受け止めきれず避ける。

小林、床に倒れこむ。

小林「花さあん」

花「何酔ってんの？」

小林「なんかいろいろ嫌なことあって」

花「私もたつた今あったよ」

小林、手で顔を覆う。

花「え、ちよ、吐く？」

小林「何で俺じゃないんですか」

花「え？」

小林「俺でいいでしょ。妥協も必要でしょ、人生」

花「小林酔いすぎ」

小林「春山さんは菅野さん好きで、春山さんもういないんだから」

花「知ってるよ」

小林「俺春山さんよりは花さん傷つけない自信

あります」

花「…：知ってるよ」

小林「あんたまだ春山さんのこと好きでしょ」

花「好きだよ」

小林「即答すなよお」

小林、泣き始める。

花「泣くなよ」

小林「俺もあんたのこと好きなんです」

花「もお。なんでなんだよお」

小林「知らないよお。花さんが花さんだからでしよお」

半べそかく花と小林。

ドアが開く。

と、菜乃香が入って来る。

小林「あ、菅野さん」

菜乃香、床に倒れている小林を見て、

菜乃香「うわ」

小林「（床に寝転がったまま）こんばんは」

花、慌てて顔を拭う。

小林「どうしたんですか」

菜乃香「聞きたいことあるんだけど」

菜乃香、花を見つめる。

花「……」

○同・リビング（夜）

勢いよく鼻をかむ小林。

菜乃香、隅に置かれたハムスターケージを見て、

菜乃香「ケイと関わりあったんだね。卒業した後も」

小林「え」

花「はい」

菜乃香「ケイからハムスターもらったんだって？」

花「菅野さんハムスター苦手ですよね？」

小林「え、え？ カニクリームコロッケってそうだったんですか？ 俺聞いたことなかったですけど」

菜乃香「言えなかったんだよね？」

花「言う必要が？」

菜乃香「ケイと浮気してたのって、山田さん？」

花「……」

小林、花を見る。

花「……二年前、春山さんから急に連絡あったんです」

菜乃香「何て？」

花「ハムスター飼わない？ って。確かハムスター飼ったことあるって言ってたよねって。あー、私が昔話したこと覚えててくれてたんだーってなって」

花、ハムスターケージを見る。

花「引き取ってくれないかって話になって、じやあうちで飼いますってなって。春山さん、うちに来たんです」

菜乃香「来たの？」

花「はい。ここに来ましたよ」

菜乃香「……それで？」

花「それで。それから。それからカニクリームコロッケがうちに来てから二年間……」

花をじっと見つめる菜乃香。

花「なーんにもなかった」

菜乃香「え？」

花「なんか連絡くれるかな、もしかしたらうちに見に来るかもって思ったけど何もなかった」

花、鼻で笑って、

花「名前決まりましたたつて送ってスタンプ返されて終わり。それが最後」

花、菜乃香を見つめる。

菜乃香「……嘘」

花「嘘じゃない」

菜乃香「嘘！」

花「（叫んで）嘘じゃないんだよこれが！ハムスターと、この狭い部屋ですつと待ってた！それが全て！」

息が上がる花。

花「あんた正真正銘春山さんの本命だよ。他のことなんかどうでもいいくらい、春山さんあなたのことしか考えてなかったよ」

菜乃香「——っ！」

菜乃香、手で顔を覆う。

花「分かったでしょ」

菜乃香「ううっ……」

花、小林からティッシュ箱を奪って菜乃香の前に置く。

菜乃香「い、嫌だよ……」

菜乃香、嗚咽を漏らしながら泣く。

菜乃香「重いよお……」

花「……え？」

菜乃香「私一生この先独身でいるしかないじゃん！」

花「は？」

菜乃香「だって私が田淵さんと付き合ってみなよ。非難殺到でしょ？ だからこの先、誰とも付き合えない……。死ぬまで一人なんだ……」

顔を見合わせる花と小林。

菜乃香「無理い……」

小林「……いやきつと天国の春山さんも菅野さんの幸せを願ってると思いますよ」

花、小林にティッシュ箱を投げつける。

小林「痛」

花「そんなわけないでしょ！」

小林「あの」

花「うるさい黙って！」

小林「はい」

うつむく小林。

ティッシュを取り鼻をかむ。

花「春山さんの本命になれたんだよ？ そんなく

らい我慢しなよ！」

菜乃香「……ケイには何の不満もなかったけど、

ずっと一緒にはいないと思ってた」

菜乃香、ティッシュを取る。

菜乃香「お互い親とも挨拶してたけど、一、二

年して、ケイの転勤があつたらそこで別れる

と思ってたし、別に、一生添い遂げるつもり

もなかったし」

菜乃香、涙を拭く。

花「……私がどんだけ、あの人の隣にいたいと思

ったか分かる？」

小林「……」

花「私は悪魔と契約してでも、寿命半分あげて

でもいい、あの人の本命になりたかった……。

それをあんたは！」

花、菜乃香に掴みかかろうとする。

小林、慌てて止める。

小林「花さん、暴力はいけない。暴力は」

花「舐めてんのか！」

菜乃香「だって死ぬとは思わないじゃん！」

花「……」

菜乃香「最後の彼女になるつもりなんてなかつ

た。なのになんで……」

菜乃香、手が震える。

菜乃香「死んじやうの……」

花「……」

菜乃香「プロポーズしようとしてたとか、無理

……」

嗚咽を漏らす菜乃香。

菜乃香「浮気しててよお……」

花「春山さんは絶対にしないね」

菜乃香「なんでよお……」

花「あんたが好きだからだよ」

菜乃香「ううっ……」

菜乃香、床にうずくまる。

菜乃香「やだぁ……」

菜乃香、床を殴る。

菜乃香「やだやだやだぁ！ 死んじややだぁ！」

うずくまって泣く菜乃香。

花「（鼻をスニツとして）苦情くるんでやめてください」

○同・玄関（夜）

田淵「悪い、世話かけたな」

小林「いえ。あの、菅野さんのこと……」

田淵「大丈夫、家まで送ってくし、様子見とくよ」

田淵の後ろでべそかいている菜乃香。

小林「よろしくお願いします。なんかすみませ
ん」

小林の後ろでむすつとしている花。

田淵「いやこつちこそ。あ、これ、よかつたら」

田淵、小林にビニール袋を渡す。

田淵「ちようど取引先の社長と飲んでてさ。も
らったんだ。食べて」

小林「え、なんかすみません」

田淵「じゃな。夜分遅くすみませんでした」

田淵、軽く会釈し、菜乃香の肩を抱いて
出て行く。

小林「あの二人付き合うんですかね」

花「知らねえよ」

小林、ビニール袋を覗いて、

小林「うわ！ カニだ！」

花「え？」

花、ビニール袋を覗く。

小林「お土産用ですかね。冷凍されてますよ。

何の社長と飲んでたんだ……」

花「どうせしょうもないベンチャーでしょ」

小林「花さんどんぐらい食べます？」

花「小林全部持って帰りなよ」

小林「いや食べきれませんよ。うち冷凍室狭い

し」

小林、花にビニール袋を渡す。

小林「とりあえず食べるぶんだけ取ってください。あと持って帰るんで」

花、ビニール袋を持って台所に向かう。
立ち止まって、

花「あ」

○ペット斎場・入口（朝）

花・小林、出てくる。

小林「サイコパス」

花「なんとも言うって」

花、小林を見る。

全身黒い服の小林。

花「まっくろくろすけ？」

小林「一応喪に服してるんで」

花「そ」

小林、合掌して、

小林「カニクリームコロッケよ、安らかに眠れ」

花「かわいがってたもんね」

小林「あ、仏壇どうします？」

花「どうもしないよ」

歩き出す花と小林。

小林「ひまわりの種お供えしなきゃ」

花「カニちゃん好きだったもんなあ」

小林「天国で見守ってくれてますよ」

花「そうだね。私の指めちやくちや噛む子だったけどね」

小林「天国で花さんの指恋しがってますよ」

花「にしても、ハムスターも火葬してくれるんだね。小動物は土に埋めるしかないのかと思

ってた」

小林「そんなことないですよ」

花「昔飼ってた子は庭に埋めたからさ」

小林「花さんってめんどくさがりだからそういうの調べないですよね。最初カニクリームコ

ロッケもそのまま段ボールに入っていましたもんね」

花「小林がホームセンター連れてってくれたね」

小林「ハムスターには小屋とか砂浴び場とか必

要なんですから」

花「うん」

小林「びつくりしましたよ。そのままぼんって
いるんですもん」

花「ね、びつくりした」

小林「（気づいて）あ……。まったく適当だな、
あの人」

花「適当なんだよ。私に対しては」

花、立ち止まる。

小林、気づいて立ち止まる。

花「だから小林、ありがとね」

小林「（笑って）どうしたんですか急に」

花「ありがとう、ずっと」

小林「……はい」

花「私生まれ変わったら小林に惚れるわ」

小林「（上を向いて）……あざっす」

花「うん」

花、空を見上げる。

煙が空に昇っていく。

○マンション・リビング

物が何もない部屋。

菜乃香、指輪を左手薬指にはめる。

菜乃香「趣味悪いなあ……」

菜乃香、指輪を見つめて微笑む。

○駅・構内

小林、スマホを持って女に近づく。

小林「あのー、アプリの」

女「あ、はい」

小林「初めまして、こばです」

女「初めまして」

小林「お待たせしました」

女「てか超黒じゃない？」

小林「今日ラッキーカラー黒だったんで」

○会社・食堂

テレビではワイドショーが流れている。

そばをすすめる花。

洋子、花の隣に座る。

洋子「いやあ新田浩平とナツミが不倫だってねえ。人間って怖いねえ」

花「お疲れ様です」

洋子「ていうか私ペット飼いたくてさあ。ウサギとか、ハムスターがいいなって思ってた。

小動物系」

花「前私ハムスター飼ってましたよ」

花、スマホを洋子に見せる。

洋子「え、かわいい。名前なんて言うの？」

花「カニクリームコロッケ」

洋子「え、なんで？」

花「好きだった人の大好物なんで」

【終】